

H.Tillの新しい分類に記載された品種の簡単な解説

2007.4.20 作成 島田壽男、島田孝

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
I-A-a <i>Gymnocalycium</i> (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
<i>Gymnocalycium gibbosum</i> (Haworth) Pfeiffer ex Mittler (和名 丸紋竜) Synopsis Plantarum Succulentarum(1812)	Buenos Aires, Argentina Rio Negro, Argentina La Pampa, Argentina	属の中で最も古く記載、大きな白花は清楚で美しい、多くの変種が知られているが、W.papsh氏によると、多色の刺が密生している変種nobile(和名 貴珠玉)、変種guerardii(和名 蝸牛玉)などは、G.reductumとしており、区別が難しい。J.Piltz氏は、分類学種G.gibbosumとG.reductumの全ての問題点を指摘し、結論として、G.reductumはG.gibbosumの分布域から産出する、より刺の強いタイプであり、G.reductumはG.gibbosumの2重に記載されたものであるとした。W.papsh氏は、分析の過程は正しいが、J.Piltz氏の結論は間違っているとされている。	ラテン語gibbosus(隆起のある)から。
<i>Gymnocalycium hyptiacanthum</i> (Lemaire) Britton & Rose Cactearum Genera Nova Speciesque Novae: 21-22 (1839).	Buenos Aires, Argentina	Backeberg氏が記載し、現在はG.uruguayense、又はG.netrelianum(和名 稚竜玉)の一つのタイプとされているUruguay産のG.hyptiacanthumとは全く別種。W.Papsh氏は、G.schroederianum subsp. bayenseとG.platenseはG.hyptiacanthumの異名同義語としている。日本でG.platenseの和名である光竜丸は、不明種(G.sp)と思われる。	後方に曲がった刺を意味するギリシャ語から。
<i>Gymnocalycium leeanum</i> (Hooker) Britton & Rose Curtis Botanical Magazine 71: pl.4184 (1845)	Buenos Aires, Argentina	W.Papsh氏によれば、パンパ地方の山岳地帯と丘陵地帯に生息し、典型的な個体はSierra del Tandilで見つかり、あらゆる点でHooker氏の学術記載と合致するとされている。ウルグアイ産の黄花で種子グループMacrosemineumに属し、根元が赤く、細い刺を持つ種は、長い間G.leeanum(和名 赤丸)とも呼ばれていたが、これはBritton & Rose両氏の誤った見解から生じ、現在はG.uruguayenseの一つのタイプとされている。	英国人園芸家John Lee氏に因む。
<i>Gymnocalycium neuhuberi</i> Hans Till & Walter Till Gymnocalycium 5(1): 59-60 (1992).	San Luis, Argentina	ピンク~ライラック色の花が美しい最近の人気種。刺は黄色から茶色の直刺。Schutz氏の分類による亜属Microsemineumを想像するが、種子が、その類縁関係の違いを説明する。また、花の構造の類似性を根拠に、G.andreaeに近いとされるが、大きな胴体、胴体から離れた刺、そしてライラック色の花色により全く異なる。	オーストリア人、カクタス愛好家G.Neuher氏に因む。
<i>Gymnocalycium reductum</i> (Link) Pfeiffer ex Mittler Enumeratio plantarum horti regii berolinensis altera 2: 21 (1822)	Buenos Aires, Argentina La Pampa, Argentina	G.gibbosumとの違いは、針形状で、箒形状の突き刺すような刺の出方、多数のより細い、色とりどりの緑刺と多数の中刺(学名の意味とは異なる?)、より短い花、より小さくて丸い果実とされているが、日本にG.gibbosumやその変種として、入って来た種も多くは、G.reductumだと思われる。また、G.mackleanumはG.reductumの異名同種とされている。	ラテン語の、減少したあるいは辺鄙を意味する、通常の球形カクタスに比べより南部に分布していた、あるいはgibbosumに比べて刺の数が少ないことによる。
<i>Gymnocalycium tanningense</i> J.Piltz KuaS 41(2): 22-26 (1990)	Cordoba, Argentina	細い刺が密生、花は白色で花喉は薄い黄色。G.borthiiにも近い品種とされる。G.Neuher氏は、新種G.lukasiki Halda & Kupcak をG.tanningenseの変種とすることを提案している。	アルゼンチン、コルドバ州Tanninga近くで生息する事に因む。
I-A-a La <b>faldense</b> (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
<i>Gymnocalycium andreae</i> (Bodeker) Backeberg (和名 黄蛇丸) Monatsschrift der DKG 2(10): 210-212 (1930)	Cordoba, Argentina San Luis, Argentina	黄色の花を咲かせる人気種、G.bruchiiと同じ産地に生息するため、花がないと生息地では、G.bruchiiとG.andreaeは容易に区別出来ないらしい。変種techersei、変種doppanium、品種cylindricumは、若い時の形状と年数を経た形状に対するおなじ種に対する名前、品種レベル以下とされている。	ドイツ人カクタス愛好家Wilhelm Andreae氏に因む。
<i>Gymnocalycium baldianum</i> (Spegazzini) Spegazzini (和名 緋花玉) Anales del Museo Nacional de Buenos Aires Ser.3, 11(4): 505-506 (1905).	Cordoba, Argentina	真紅の美化。カタマルカ州の高度2000m以上に生えている。G.sanguiniflorum、G.venturianumは同一種とされていたが、最新の論文では、G.sanguiniflorumとG.venturianumはG.x heidiaeと同じとする説が有力である。G.baldianum var. albiflorum(和名 白花緋花玉)は、この変種から除外され、G.rosaeと同じとされている。	C.Spegazzini氏の友人で後援者のJ.Baldi氏に因む。
<i>Gymnocalycium bruchii</i> (Spegazzini) Hosseus (和名 羅星丸) Anales de la Sociedad Cientifica de Argentina 96: 73-75 (1923)	Cordoba, Argentina	最初Fraileaとして記載された、花首の短い花が特徴。異名同種とされて来たG.lafaldenseは、G.Neuher氏が、より大型になるG.bruchiiの亜種であるとし、G.bruchii fa. hossei(和名 汚染玉)、G.bruchii fa. spinosissimum(和名 白蜘蛛)、G.bruchii fa. enormelはG.lafaldenseの異名同種としている。	C.Spegazzini氏と同時代の、アルゼンチン、コルドバのカクタス採取家Carlos Bruch博士に因む。
I-A-c <i>Quehliana</i> (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
<i>Gymnocalycium amerhauseri</i> Hans Till Gymnocalycium 7(3): 131-134 (1994)	Cordoba, Argentina	最も近い類縁関係種はG.andreaeとG.baldianum であるが、スリムな漏斗形状の長く白色から淡いバラ色の花で異なる。また、G.andreaeとG.baldianumの種子はG.amerhauseriとは違い、果皮は一枚の頑丈な皮状の皮膜を持っている。	オーストリア人カクタス愛好家Helmut Amerhauseri氏に因む。
<i>Gymnocalycium berchtii</i> G.Neuher Gymnocalycium 10(3): 217-220 (1997)	San Luis, Argentina	サンルイス州産の新種。Gymnocalycium gibbosumやG.strigiliumと関係があるとされる。小さな外観、黒灰色の表皮、隆起の無い扁平な稜、青い果実などの特徴があり、玄人好みの品種。	オランダ人カクタス愛好家Ludwig Bercht博士に因む。
<i>Gymnocalycium borthii</i> Koop ex H.Till KuaS 27(2): 25-27 (1976)	San Luis, Argentina	G.gibbosumの亜種とも考えられている。G.strigiliumに良く似ていて混同されるが、楕円形の刺座、トンボ形状の刺、花喉部が黄緑色で違うとされている。産地もG.strigiliumがMendozaに対し、San Luisである。	オーストリア人植物採取者Hans Borth氏に因む。
<i>Gymnocalycium capillense</i> (Schick) Hosseus (和名 桃冠玉) Mollers Deutsche Gartner-Zeitung 38(26): 201-202, 203 (1923)	Cordoba, Argentina	Cordoba州、Capilla del Monteの周辺地域に主に生息する。G.sigelianumとG.deeszianumは、AGGによれば、G.capillense v. sigelianumとG.capillense v. sigelianum fa. deeszianumであるとしている。日本で流通しているG.deeszianum(和名 月冠玉)は、G.gibbosumかG.reductumの黄刺タイプである。また、Gymnocalycium mucidum もG.capillense v. mucidumとして、AGGにより提案されている。	コルドバ州の集落Capilla del Monteの近くで生息するため。
<i>Gymnocalycium erinaceum</i> J.Lambert Succulenta 64(3): 64-66 (1985)	Cordoba, Argentina	学名の通り、細い刺が密生している。花は白色。	ギリシャ語の"ハリネズミ形状"を意味する。刺の形状から。
<i>Gymnocalycium x heidiae</i> G.Neuher Gymnocalycium 12(1): 275-282 (1999)	Catamarca, Argentina	Catamarca州で発見された、花色が白、橙、赤など、変化に富む自然交配種。片親は、G.rosae(G.baldianum v. albiflorum)とされているが、もう一方の片親は、G.baldianumかどうかは不明。	G.Neuher氏の妻Heidemarie Neuher氏に因んでいる。
<i>Gymnocalycium kieslingii</i> O.Ferrari CSJ (US) 57(4): 244-246 (1985)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	Gymnocalycium kieslingiiの品種alboareolatumは、同じ地域に生えている外観がよく似た、全く種子グループの違うG.alboareolatumと混同されている。	アルゼンチン人植物学者でカクタス専門家Robert Kiesling博士に因む
<i>Gymnocalycium kroenleinii</i> R.Kiesling & O.Ferrari KuaS 51(12): 315-318 (2000)	La Rioja, Argentina	R.Kiesling博士とO.Ferrari氏命名の最新品種。La Rioja, Sierra del Malanzan産とのこと。詳細は不明、写真はVolker Schaedlich氏のホームページでhttp://www.gymnos.de/で見られる。	Marcel Kroenlein氏にちなむ。
<i>Gymnocalycium leptanthum</i> (Spegazzini) Spegazzini Anales de la Sociedad Cientifica de Argentina 99: 138-140 (1925)	Cordoba, Argentina	Spegazzini氏によれば、G.leptanthumは、長くて細い子房により特徴付けられる。本物のGymnocalycium leptanthumはこれまで、再発見されていない。	ギリシャ語で華奢な花を意味する、恐らくスリムな花による。
<i>Gymnocalycium calochlorum</i> (Bodeker) Y.Ito (和名 火星丸) Monatsschrift der DKG 4(11): 260-262 (1932)	Cordoba, Argentina	直ぐ仔吹きし、群生する。白からピンク色の刺で中刺は無い。花は淡ピンク色で花首は長い。H.TillによるG.parvulumと近似している。	ギリシャ語の美しい緑色を意味する、光沢のある緑色の表皮から。

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium mucidum Oheme KuaS 1(12): 197-198 (1937)	Cordoba, Argentina	疑問の多い種とされている。Backeberg氏はG.mucidumをG.mazanenseの1形態と見なし、Piltz氏、Metzing氏およびSchweitzer氏らは、G.mucidumとG.glaucum、G.ferrariは多くの特徴で一致し、類縁関係にあることを立証しようとした。しかし、AGGによれば、Oheme氏の学術描写とは一致せず、Oehme氏がその種を、G.sutterianumに近い所に置いていたこと、暗い黄土色の花糸などにより、G.capillense v. mucidumであるとされている。	ラテン語の微の生えた、ねばねばしたを意味している、微の生えたような灰色の胴体の色合いに由来する。
Gymnocalycium papschii H.Till Gymnocalycium 14(3): 405-408 (2001)	Cordoba, Argentina	一見するとG.bruchiiの一種のように見えるが、G.bruchiiとは違い、側芽を出さず、伸びた球形から短い円柱形に成長する。また、この種は、赤い花喉部を持つ。	オーストリア人で、オーストリアカクタス協会会長のWolfgang Papsch氏に因む。
Gymnocalycium parvulum (Spegazzini) Spegazzini Anales de la Sociedad Científica de Argentina 99: 141 (1925)	Cordoba, Argentina	H.Tillによれば、G.calochlorum var. proliferum (和名 唐子丸)の異名同種であるが、日本の唐子丸は、花の形状や色が異なり、本種やG.bruchii、G.paraguayenseなどの交配が考えられる。また、和名 パルブラムとして、日本で流通しているのは、G.stellatumの一種のタイプであり、ここで言うG.parvulumとは全く別種。	ラテン語の小さいを意味する、恐らく小さな胴体サイズから来た名前。
Gymnocalycium poeschlilii G.Neuhuber Gymnocalycium 12(3): 295-300 (1999)	Cordoba, Argentina San Luis, Argentina	当初、G.berchtiiに数えられていたが、より大きな胴体、および4週間早い開花時期、しばしば雌性、又は雄性と決定される花の発生、変わったハイラム・ミクロピラー領域を持つ種子などにより、分離された。	オーストリアWelsのJosef Poschl氏に因む、 "Arbeitsgruppe Gymnocalycium"の後援者から。
Gymnocalycium quehlianum (F. Haage ex Quehl) Vaupel ex Hosseus (=Gymnocalycium robustum Kiesling) Monatsschrift für Kakteenkunde 9(3): 43-44 (1899) and Cactus and Succulent Journal, 74(1): 4-9 (2002)	Cordoba, Argentina	G.stellatumとその変種が、G.quehlianum及びG.quehlianumの変種とされて来た事については、長い論争の結果、H.Till氏の意見が認められ、G.quehlianumは、G.stellatumと種子グループの異なるG.robustum Kiesling (sensu Till)とされている。H.Till氏は、G.quehlianumの名前を維持したが、国際植物命名規約(ICBN)で混乱した名前は、新しい学名を採用するとの規定があり、皮肉にも、反対の立場を取っていた、R.Kiesling博士が記述した学名になった。	ドイツ人カクタス愛好家でドイツカクタス協会創設会員でもあり、Haage商会の執事もあったLeopold Quehl氏で、に因む。
Gymnocalycium rosae H.Till Gymnocalycium 8(3): 159-162 (1995)	Salta, Argentina Catamarca, Argentina	H.Till氏は、最初、G.baldianumと関係があり、最も北のSalta州に位置する点に特徴があるとしてG.rosaeを学術記載した。しかし、後に、W.Till博士とG.Neuhuber氏が、広い範囲に生息するG.baldianum var. albiflorum Bercht (和名 白花緋花玉)も同じ種とした。	オーストリア人カクタス専門家Hans Till氏、の妻Rosa Till氏に因む。
Gymnocalycium sanguiniflorum (Werdermann) Werdermann Fedde Repertorium specierum novorum vegetabilis 30: 56-57 (1932)	Catamarca, Argentina	W.Till博士とG.Neuhuber氏は、G.sanguiniflorum、あるいはG.venturianumとして呼ばれていた植物は、もしそれらが栽培交配種で無いならば、G.x heidiae(自然交配種)とすることが出来る。何故なら、これらの植物はいつも長く伸びた花蓋 (Perikarpell) を伴う花を持っているとしている。	血のように赤い花を意味する。
Gymnocalycium strigilianum Jeggle ex H.Till KuaS 24(12): 267-268 (1973)	Mendoza, Argentina	暗い胴体色を理由に、G.strigilianumをG.gibbosumの類縁種へ入れる傾向がある。H.Till氏によれば、G.gibbosum とG.reductumのタイプは、古くから短く短い円柱形になるのに対し、G.strigilianumは、幅広い円形の胴体形状にとどまる。また、大きな違いが花の構造にある。G.strigilianum漏斗形状の花は、Gymnocalycium gibbosumのどちらかという鋭鐘形状の花と対立している。Franz Strigl氏によると本種の実生は難しく、発芽後1ヶ月後からの小さな物は既に長い乾燥期を必要としているらしい。	オーストリア人のギム/愛好家で、AGGの共同設立者Franz Strigl氏に因む。
Gymnocalycium sutterianum (Schick) Hosseus (和名 冠玉) Revista del Centro Estudiante de Farmacia 2(6): 16 (1926)	San Luis, Argentina Cordoba, Argentina	G.capillenseに良く似ているが、暫定的にG.capillense類縁種からAGGは、除外している。G.sutterianumは、ギム/カリキウム属の中で染色体が6倍体である数少ない分類学種に属するらしい。	アルゼンチン、コルドバ (Cordoba) 州Capilla del Monteで不動産取引をしていた、カクタス採取しヨーロッパへ送ったW.Sutter氏に因む。
Gymnocalycium uebelmannianum W.Rausch Succulenta 51(4): Titelbild, 62-64 (1972)	La Rioja, Argentina	G.uebelmannianumは3つの黄、赤、白色の異なる色調の花をつける時がある種とされる。それは、G.andreae、G.baldianumとのより近い類縁関係を示唆する。Berger Franz氏の現地調査では、実生苗で、散発的に出会う赤紫色の花の色は、生息地の個体では全く観察出来なかったとしている。	スイスのカクタス園芸家で、ブラジル産カクタスの専門家Werner Uebelmann氏に因む。
-B-B1-d Mostiana (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium albiareolatum W.Rausch Succulenta 64(10): 213-214 (1985)	La Rioja, Argentina	国際植物命名規約、第60条に基づき、転写により、G.albiareolatumと変更されたが、元の名前でも正しい綴りであるとAGGは主張している。G.alboarolatumはG.rhodantherum、G.weissianum、G.guanchinenseなどのG.rhodantherum類縁種とは、カブ形状の根により区別され、短くて大抵胴体の方に傾く刺の出方、白い綿毛の生える刺座、すりすりとした漏斗形状の花をもち、さらに、花粉が落ちた後、葯の赤い色調(rhodantherumの由来)は明瞭になるとしている。	白い刺座の意味、白い綺麗な綿毛を持つ刺座から来ている名前から。
Gymnocalycium ambatoense J.Piltz KuaS 31(1): 10-13 (1980)	Catamarca, Argentina	Catamarca 州のAmbato山脈の900mから1100 mに生息する。昔は、G.mazanenseと関係があるとされて来たが、現在は、G.carminanthumとの類縁関係があるとされている。しかし、花は白で花喉は赤色である。広い分類方法を取る、David Hunt博士は、The New Cactus LexikonでG.oenanthemum(和名 純緋玉)(=G.tillianum=G.carminanthum)と同じとしている。一方、Kiesling博士はG.hyboleureum(和名 碧巖玉)と同じとしている。	アルゼンチン、カタマルカ州Sierra Ambato山中に生息する事による。
Gymnocalycium bayrianum H.Till ex H.Till KuaS 18(12): 222-224 (1967)	Tucuman, Argentina Salta, Argentina	H.Till氏とG.Neuhuber氏によれば、G.bayrianumの外花弁の珍しい色合いは、G.spegazzinii Br. & R.との類縁関係を示す。しかし、分布地域は、最南の発見場所、Sierra de MedinaとSierra del Nogalito(2つともTucuman州)から、かなり北に向かってSalta州の南東に有る山中まで広がるが、分布地域はG.spegazziniiと重なる場所は観察されていないとしている。	オーストリア、カクタス愛好会の元会長Alfred Bayr氏に因む。
Gymnocalycium bicolor B.Schutz Friciana 1(7): 2-3 + 8 (1962)	Cordoba, Argentina	上側は明るい色、下側は暗い色の2色の特徴がある刺を持つタイプである。Unligが発売した、G.bicolor var. simplexはG.bicolorに対する相違は殆ど無い。H.Till氏と氏とH.Amerhauserは、G.valnicekianum(和名 活火山)変種 bicolorとしている。David Hunt博士は、G.valnicekianumもG.mostiiとしている。	2色の刺を持つことによる。
Gymnocalycium cardenasianum F.Ritter (和名 光琳玉) Taxon 13(4): 144 (1964)	Tarija, Bolivia Chuquisaca, Bolivia	ギム/の最大人気種。原産地は、Quebrada del ToroにあるG.spegazziniiの最北の分布域よりも、さらに250km北のボリビア内にあり、近づくのが非常に困難な地帯に生息する。F.Ritter氏が発見した直豪刺のG.armatumは、最近再発見されたが、G.cardenasianumの品種レベルとされている。	ボリビア人植物学者でカクタス専門家Martin Cardenas氏に因んでいる。
Gymnocalycium carminanthum H.Booth & H.Koop KuaS 27(4): 73-76 (1976).	Catamarca, Argentina	カーミン色の花が美しい品種。G.oenanthemum、G.tillianumとの区別は難しい。G.tillianumが2400 - 3500mに生えているのに対し、本種は1500m程度の高度に生えている。Franz Berger氏によると、G.carminanthumとG.tillianumは、明らかに開花時期の時間的ズレが存在するとしている。	ラテン語の"carminius"、"カーミン色"とギリシャ語の"anthos"、"花"を合わせた言葉、花の色に由来する。

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium catamarcense H.Till & W.Till (=Gymnocalycium hybopleurum (K.Schumann) Backeberg (和名 碧巖玉) Kaktus ABC: 289-290 (1935) and Gymnocalycium 8(1): 142-143 (1995)	Catamarca, Argentina	Backeberg氏は、パラグアイ産のEchinocactus multiflorus Hook var. hybopleura K.Sch. を、G.hybopleurumとして、種のランクに引き上げた。しかし、命名した北アルゼンチン産の植物、G.hybopleurumは、形式上、新しく学術記載が必要。そのため、H.Till氏とW.Till博士により、G.catamarcenseとして、内容の訂正と拡張した学術記載がなされた。日本で五大州の和名で流通しているのは、G.catamarcense(=G.hybopleurum)の類縁種と思われる。また、Backeberg氏が、記述した変種ferox や変種 ferociorは、別の類縁関係種と考えられ、G.mostiiの亜種(H.Till)やG.castellanosiiの亜種(D.Hunt)として提案されている。	アルゼンチン、カタマルカ州に生息し、かつ山岳地帯生息する事に由来する。
Gymnocalycium ferrari W.Rausch KuaS 32(1): 6-7 (1981)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	G.glaucumと密接な関係があるとされる。G.Charlesは、G.glaucumの亜種としている。	アルゼンチンの農場経営者で、カクタス採取者Omar Ferrari工学士に因む。
Gymnocalycium glaucum F.Ritter Sukkulentenkunde (Jahrbucher der S.K.G) 7/8: 37-38 (1963)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	灰緑色から茶色の肌の玄人好みの品種。G.ferrari と密接な関係があるとしているが、明確な差は不明。	ラテン語の灰緑色あるいは青灰色を意味する、胴体の色合いから来ている。
Gymnocalycium guanchinense B.Schutz (和名 歡喜玉) Zpravy Ceskoslovenske kaktusarske spolecnosti 2: 21 (1947)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	Rhodantherum類縁種に属する。この種を発見したFric氏が正確な発見場所を言わず、Rio Guanchin渓谷周辺と言っていた。しかし、そこでは発見出来ず、その種はCuesta Mirandaで発見された。G.guanchinenseはG.rhodantherumとは、上に伸びた球形、古い個体では短い円柱形状の胴体、より長く長さ40mm、曲がらずに頭頂部に向かう棘の張り出し、短い子房部を持つ花、大きなHilum-Miropylar-Regionを持つ種子により異なることされる。F.Ritter氏によるG.guanchinense 変種robustusとG.guanchinense変種tianogostaense(両者とも裸名)は、G.catamarcense 亜種schumidaniumの一種の形態であると、H.Till氏は解説している。	アルゼンチン、ラリオア州Guanchin近郷に生息することによる。
Gymnocalycium hossei F.Haage Kakteen Preisverzeichnis: 14-15 (1927)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	G.hossei, G.mazanense(和名 魔天竜)、G.nidulans(和名 猛鷲玉)は、生息地でも区別は難しいとされ、D.Metzing氏によれば、G.hosseiがG.mazanense、G.nidulans、G.weissianum(和名 華武者)の元の名前とされる。D.Hunt博士もThe New Cactus Lexicon で同様な見解を取っている。G.hosseiの学名で輸入され、日本で、五大州として流通しているのは、G.catamarcense(=G.hybopleurum(和名 碧巖玉))のうちのタイプと思われる。	ドイツ人植物学者で、アルゼンチンに定住し、コルドバで植物学教授だったCarl C. Hosseus博士に因む
Gymnocalycium mostii (Gurke) Britton & Rose (和名 紅蛇丸) Monatsschrift fur Kakteenkunde 16(1): 11-12 (1906)	Cordoba, Argentina	古くから日本に渡来し、刺が太く、大きなサーモンピンク色の花を咲かす品種。G.kurtzianum(和名 黒豹玉)との差は、先の尖ったコブ状隆起の稜、幾分強い刺、より小さくて白色で根元がバラ色の花とされているが、差は殆ど無く品種レベルG.mostii fa. kurtzianum とされる。また、H.Till氏によれば、G.grandiflorum(和名 巨輪玉)は、G.monvillei var. grandiflorumであり、現産地のコルドバではG.mostiiと一緒に生えており、G.monvilleiの黄色の刺も黒くなり、区別が難しく、日本にG.grandiflorum(和名 巨輪玉)として入って来た種は、G.mostii(和名 紅蛇丸)と取り間違えられたと思われる。	アルゼンチン、コルドバのカクタス採取家Carlos Most氏に因む。
Gymnocalycium nidulans Fric ex Backeberg (和名 猛鷲玉) Kaktus ABC: 293, 417 (1935)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	G.hossei, G.mazanense(和名 魔天竜)、G.nidulans(和名 猛鷲玉)は、生息地でも区別は難しいとされ、D.Metzing氏によれば、G.hosseiがG.mazanense、G.nidulans、G.weissianum(和名 華武者)の元の名前とし、G.mazanense、G.nidulans、G.weissianumはその異名同種としている。D.Hunt博士もThe New Cactus Lexicon で同様な見解を取っている。AGGは、G.weissianumのみ、G.hossei類縁種から分離し、Rhodantherum類縁種とした。今後のAGGの研究が待たれる。	ラテン語の「鳥の巣」を意味する"nidus"の縮小形で、小さな胴体サイズ、あるいは巣のように密生した刺からか？
Gymnocalycium nigriareolatum Backeberg (和名 蕪装玉) Blatter fur Kakteenforschung, Liefg.5, Bl.74-1 (1934)	Catamarca, Argentina La Rioja, Argentina	H.Till氏によれば、単幹で、決して側芽を出さないとしている。ただし、Catamarca州のLas Pirquitasの場合だけは、その種は幾分側芽を出すとしている。日本の蕪装玉は仔吹きする。Backeberg氏は、Las Pirquitas産のもので、刺の密生したものを変種densispinum(和名 濃装玉)として学術記載したとされている。変種densispinumは、刺は幾分密生しているが、側芽を出し群生するのが特徴である。日本の蕪装玉は、Las Pirquitas産のG.nigriareolatumか変種densispinumと関係があると思われる。一方、Catamarca州のPortezueloで産する、G.curvispinumは、基準タイプから重大な相違点無く、品種の階級すら支持する事はできないとし、G.nigriareolatumの異名同種とされている。	発見された産地の個体の刺座が恐らく濃く黒かったため、そしてオーストリア人カクタス識者Albert Simoi博士に因む。
Gymnocalycium oenanthemum Backeberg (和名 純緋玉) Blatter fur Kakteenforschung Liefg.9, Bl.74-4 (1934)	Catamarca, Argentina	Backeberg氏は、当初、花の色を光沢のあるワイン系赤色としたが、あとで花の色は幾分濃いサーモンピンク系赤色に変わることもあったと変更した。後者の花色は、G.carminantumやG.tillianumを想定させる。G.oenanthemumについては、まだ良く分からない種である。日本で純緋玉として流通しているのは、G.carminantumかG.tillianumのどちらかだと思われるが、肌色が薄く、花が大きいものが多いので、G.carminantumに近いかも知れない。D.Hunt博士らのThe New Cactus LexiconではG.carminantumとG.tillianumは、説明無しにG.oenanthemumと同じとしている。	ギリシャ語でワイン色の花を意味する、濃い赤い花に因む。
Gymnocalycium prochazkianum Sorma Gymnofil 28(1/2): 2-6 (1999)	Cordoba, Argentina	Cordoba州、Quilinoの南部の低い山の背で発見された新種。Trichosemineumの種子グループに属するよう見えたいが、驚いたことに、下属Microsemineumに属していたとしている。	チェコ人カクタス愛好家、ギムノカリキウム専門家Jaroslav Prochazka氏に因む。
Gymnocalycium pugionacanthum Backeberg ex H.Till (和名 彈太刀丸) Kakteenlexikon: 172-173 (1966)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	H.Till氏によるとG.pugionacanthumはG.hybopleurumと多くの共通点を持つ。しかし、それらは異なる類縁種とされる。G.pugionacanthumはG.hossei集合体としている。G.hossei とは、よりスリムな花、より硬直した、より堅い、大抵、より真っ直ぐな刺で異なるとしている。一方、D.Hunt博士やR.Kiesling博士は、G.catamarcense(=G.hybopleurum)のタイプとして考えている。最近のPilzの種子カタログでは、G.pugionacanthum sensu Tillとあるので、違う種を論じているのかも知れない。	ラテン語の「両刃の短剣」と、ギリシャ語の「刺」を意味する言葉の合成語。
Gymnocalycium rhodantherum (Boedeker) Backeberg Kakteenkunde 2(1): 13-14 (1934)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	H.Till氏は、G.hossei(G.mazanense、G.nidulans)とG.rhodantherumは異なる発展系統に属し、薬が赤い色調(rhodantherumの由来)のG.rhodantherum、G.alboareolatum、G.guanchinense、G.weissianumは、より近い類縁関係があるとしている(Rhodantherum類縁種)。G.mazanense var. breviflorum(和名 若武者)は、G.rhodantherumとしている。	ギリシャ語で赤いバラ色の薬を持つ意味、薬の特別な色合いから

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium ritterianum W.Rausch KuaS 23(7): 180-181 (1972)	La Rioja, Argentina	W.Rausch氏は、Rioja州、Famatina近く 高度3000m以上3500mで発見したとしているが、これは間違いで、AGGにより、Famatina山脈の前山の上、海拔およそ1800mの地点で発見されている。H.Till氏によるとRhodantherum類縁種のG.guanchinenseに近い種である。G.ritterianumは、年数を経ても短い円柱状ではなくて、扁平に育つことやカブ形状になる胴体、胴体のほうへ曲がった刺、大きく開くライラック系バラ色の葯とバステルカラーの花により、G.guanchinenseとは異なるとしている。	ドイツ人地質学者、アマチュア植物学者、多数の南アメリカ産カクタスの発見者Friedrich Ritterに因む。
Gymnocalycium spegazzinii Britton & Rose (和名 天平丸) The Cactaceae 3: 155 (1922)	Salta, Argentina Tucuman, Argentina Catamarca, Argentina	1905年Spegazzini氏が記載したE.loricatusと同じ。Spegazzini氏は、この名前を使わず元のG.loricatumを使い続けた。高度およそ海拔1700mから2900mに定住している。刺の色や形状・長さなどの変異が大きい品種である。H.Till氏によれば、高所での出現はサルタ州に多い。最北の知られている生息は海拔およそ2800mのQuebrada del Toroとされており、Backeberg氏の3500mのQuebrada del Toroは、間違いとしている。大型変種major、白刺変種punillense、長刺変種horizontaliumなどが記述されている。	Britton & Rose氏がアルゼンチン人、植物学者Carlos Spegazzini氏に因んで命名。
Gymnocalycium tillianum W.Rausch KuaS 21(4): 66 (1970)	Catamarca, Argentina	赤色の花が美しい品種。G.carminanthum(高度1500m程度)に比べて、2400~3500mの高い高度に生えている。花の大きさは、G.carminanthum(幅6cm、長さ4.5cm)に比べて小さい(幅2.5cm長さ3cm)、また表皮はG.carminanthumに比べ濃色。Franz Berger氏によると、G.carminanthumとG.tillianumは、明らかに開花時期の時間的ズレが存在し、交配は起こりにくいとしている。G.oenanthemumとの関係は不明。Rudolf Slabalは、高い高度に生えるG.carminanthum var. montanumを学術記載したが、これは、G.tillianumと思われる。	オーストリア人、カクタス愛好家で、研究者でも有るHans Till氏に因む。
Gymnocalycium weissianum C.Backeberg (和名 華武者) Kaktus ABC: 296-297, 417 (1935)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina	H.Till氏とH.Amerhauser氏によれば、AGG協力者による、何度もの現地調査研究を通して、Backebergの記載した、少量の現存する植物個体と生息地の植物個体、外見や花の比較をすることにより、G.weissianumの発見場所を特定したとしている。主要分布地はLioja州のLosRoblesとSchaquiの間の古い街道の東部で、Velasco山脈の西側に、単幹または群生状態で、しばしばG.saglionisと一緒に生育しているとしている。AGGは、本種をRhodantherum類縁種とし、習性の似ているG.guanchinenseと区別するのは難しいが、密生した、たいいてい真っ直ぐで滅多に捻じ曲がらない刺の出方と古い個体に関しては、珍しい2本の頭頂部に向かう中刺と優美な花であるとしている。広い分類を取るD.Mezing氏やD.Hunt博士によれば、G.mazanense、G.nidulansと同様、G.hosseiの異名同種としている。	オーストリア人カクタス愛好家、オーストリアカクタス協会初代会長Karl Weiss氏に因む。
-B-B1-e Saglioniana (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium monvillei (Lemaire) Britton & Rose Cactearum Aliquot Novarum: 14-15 + pl. (1838)	Cordoba, Argentina San Luis, Argentina	H.Till氏によれば、本種はG.multiflorumと混同されているとし、Britton & Rose両氏が、"The Cactaceae"の中でCosquin近くで採取し、描写したG.multiflorumは、間違い無くG.monvilleiだとしている。H.Till氏によれば、本来のG.multiflorumは、パラグアイ産のもので、G.ourselianumの異名同種としている。アルゼンチンのCordoba産のG.multiflorumとされているのは、G.monvilleiの一つのタイプであるとしている。このことから、日本で多花玉とされているものは、G.monvilleiの一つのタイプであると思われる。また、G.monvilleiとして日本に入ってきたものが、日本で言うモンビー玉と異なるので、金碧として販売されたとの記録があり、金碧もG.monvilleiかその変種であると思われる。日本でモンビー玉として流通しているのは、その外観や白い花と赤い花喉により、G.paraguayense、G.ourselianumなどを起源とする園芸種と思われる。Monvillei類縁種として、亜種achirasense、亜種gertrudae、亜種horridespinum(和名 恐鬼丸、鐘鬼玉)、変種grandiflorum、変種steinieriなど多くの亜種、変種が記述されている。	フランス人実業家で植物収集家の男爵Hippolyte Boissel de Monville氏に因む。
Gymnocalycium saglionis (Cels) Britton & Rose (和名 新天地) Portefeuille des Horticulteurs: 180 (1847)	Catamarca, Argentina La Rioja, Argentina San Juan, Argentina Salta, Argentina Tucuman, Argentina	アルゼンチンの広い範囲に分布する。H.Till氏とW.Till博士によれば、G.saglionisの分布地域を考察すると、南と北の部分区域に識別できる。さらに北のグループは、高地と低地グループに分かれるとしている。南の地域での変異性は、北の群生よりも著しく大きいとしている。その中で、明るい琥珀色の刺と光沢のあるバラ色の花を持つ、fa.splendensが品種レベルのものとして提案されている。北の高地タイプは、大体密生する刺を持ち、瘤状隆起が目立つ。その代表が変種rubispinumとして知られている。また、低地タイプは側芽を出すことにより、G.pflanziiとの類似性が見られ、変種tucumanenseの下に栽培されている。両変種とも品種レベル以下とされる。さらに、最北のJujuy州に、亜種tilcarensisが、Saglionis類縁種の最北の分類学種になる。H.Till氏らは、本種の原型は、G.saglionis ssp. tilcarensisと見ている。	カクタス愛好家Joseph Saglio氏に因む
Gymnocalycium schuetzianum H.Till & Scatzl KuaS 32(10): 234-236 (1981)	Cordoba, Argentina	Monvillei類縁種とされるが、詳しいことは不明。ピンク色の花を咲かせる。由来不明の赤い花の個体も有らうし、H.Till氏らによれば、刺座はG.monvilleiの場合、縦長から長楕円形、G.achirasenseの場合楕円形、G.schuetzianumの場合小さく円形、G.horridespinumの場合、大きき円形で、上端に若い血のように赤い真珠のような蕾がつくとしている。孤立した一族G.horridespinumと同じ場所にG.schuetzianumの比較的小さい分布域があるとの記述がある。D.Hunt博士は、The New Cactus Lexiconでは、G.monvilleiと同じとしている。Field番号も、HT912とFR430しか把握していない。	チェコ人弁護士、カクタス愛好家、ギムノカリキウム属の専門家Bohumil Schutz博士に因む。
-B-B1-e Chiquitana (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium chiquitanum Cardenas (和名 良寛) Cactus 18(78): 95-97 (1963)	Santa Cruz, Bolivia	異学名は、G.hammerschmidii Backeberg。黄褐色から濃褐色の刺で、サーモンピンクから薄いライラック色の美花を咲かせ、側芽を良く出す。同地域に生えるG.paediophilumと類縁関係があるとされる。	ボリビア、サンタクルス地区、Chiquitas州に生息する事による。
Gymnocalycium paediophilum Ritter ex Schutz Kaktusy 13(5): 100-101 (1977)	Boqueron, Paraguay	胴体は球形、針形状の直刺、最初は赤いが、茶色、灰色に変わる。下部に側芽を出す。F.Ritter氏はこの種を1963年に発見した。種子は採取番号(フィールド番号)FR 1177のもとにWinter女史により売出された。V.Schaedlich氏によると、この種が生息地で再び見つかるまでに30年以上掛かった。H.Amerhauser氏とR.Boss氏が1996年初めて再発見した。	ギリシャ語で小さな子供の愛好者を意味する、多くの側芽を出す事に由来する、最初paediophilumと綴られたが、後に正しい綴りpaediophilumと改められた
-B-B1-f Chacoensiana (H.Tillの分類による亜節、又は列)			

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium chacoense H.Amerhauser Gymnocalycium 12(4): 301-304 (1999)	Santa Cruz, Bolivia	1996年に発見したH.Amerhauser氏によれば、外観はGymnocalyciumにもWeingartiaの北の代表種にも分類する事は可能であるが、花の構造、とりわけ種子の構造は、新種をGymnocalyciumに所属する事に賛同するとしている。G.paediophilumとは、稜数がより多い、丸みがある、中刺が多数、花は非常に狭い漏斗形状、2倍小さい、花喉部は黄緑色、果実は、より小さいなどにより異なるとしている。	ボリビアのChaco地域に生息する事に因んでいる。
-B-B2-h Macrosemineum (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium angelae Meregalli KuaS 49(12): 283-290 (1998)	Corrientes, Argentina Uruguay	1998年にM.Meregalli氏がアルゼンチン、Corrientes州で発見した新種G.angelaeを発表。G.denudatum似るが、異常に大きいハイラム・マイクロピラー領域を持つこと、H.Till氏によれば、W.Rausch氏が1988年にウルグアイのRio Uruguayの東から持ち帰ったG.sp. R350と似ていることを指摘。K.H.Prestle氏は、2004年のAGG誌に、このTill氏の指摘を参考にして、G.denudatumとG.angelaeの間に連鎖があるのではないかとし、G.angelaeをG.denudatumの亜種として記述した。花の形と種子はG.denudatumと大きな一致があり、亜種angelaeは明確な赤い色の花喉部を持つとしている。	Angeles G. Lopez de Kiesling女史に因む。アルゼンチンの植物学者Robert Kiesling氏の前の妻から。
Gymnocalycium denudatum (Link & Otto) Pfeiffer ex Mittler Icones plantarum rariorum 2:17, pl.9 (1828)	Rio Grande do Sul, Brazil Uruguay	分布の中心は、南ブラジル Rio Grande do Sul 州にあり、変異が大きい種である。アルテガスと日本で流通している種は、これに該当すると思われる。本来のアルテガスは、G.uruguayenseの亜種である。天王丸を小型にしたような種で、側芽を吹くものと、吹かないものがある。本学名が、和名 蛇竜丸に相当するが、日本で和名 蛇竜丸として流通しているものとは、合致しない。蛇竜丸は、G.paraguayenseやG.denudatum v. heuschkelianumとされる種に近い。	ラテン語の "裸" の意味する、殆ど刺で覆われていない、胴体に因んでいる。
Gymnocalycium melanocarpum (Arechavaleta) Britton & Rose Anales del Museo Nacional de Montevideo 2: 220-222 (1905)	Paysandu, Uruguay	G.uruguayenseと類似しているが、蜘蛛の脚のような棘の並び方と名前の由来である、暗いオリーブ系緑色の果実により異なる。K.H.Prestleにより2001年に再発見された。	ギリシャ語の "黒い果実" を意味する、果実の色合いに因んでいる。
Gymnocalycium netrelianum (Monville ex Labouret) Britton & Rose Monographia de la famille des Cactees: 248 (1853)	Uruguay	A. Hofacker氏らによると、G.uruguayenseは変異が大きく、大別すると刺の太いものと、細いものに分かれるが区別は難しいとしている。G.netrelianumは、刺の細いタイプに属する。	Netrel氏に因む?。
Gymnocalycium rauschii H.Till & W.Till Succulenta 69(2): 27-31 (1990)	Tacuarembó, Uruguay	H.Till氏は最初、G.uruguayenseもしくはG.leanum (G.uruguayenseの一つのタイプで、現在は誤認 (misidentify) したとされている。G.reductum subsp. leanumが本来のG.leanum) の極端なタイプとして格付けしていた。しかし、比較的小さい、白っぽい花喉部を持つバラ色の花と種子の特徴により特異な種として位置付けた。2つの種子グループOvatisemineum(=Gymnocalycium)とMacrosemineumの過渡形を示しているとしている。	オーストリア人カクタス専門家、南アメリカへの旅行者 Walter Rausch氏に因む。
Gymnocalycium uruguayense (Arechavaleta) Britton & Rose Anales del Museo Nacional de Montevideo 2: 218-220 (1905)	Artigas, Uruguay Tacuarembó, Uruguay Rivera, Uruguay Rio Grande do Sul, Brazil	G.uruguayense、G.netrelianum、G.leanum、G.guerkeanum、G.hyptiacanthum、G.artigasの名前の下で学術記載された個体群に相当する。ここで言うG.leanumとG.hyptiacanthumはG.gibbosum系の物とは別の種である。大別して、刺の太いG.uruguayenseと刺の細いG.netrelianum、G.leanum、G.hyptiacanthumと呼ばれるタイプに分かれるが、A. Hofacker氏らによると変異が大きく区別が困難としている。	生息地のウルグアイに因む。
-B-B2-h Macrosemineum (H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium buenekerii (Buining) Swales CSJ (GB) 40(4): 97-100 (1978)	Rio Grande do Sul, Brazil	濃いピンク色の花を咲かせ、良く側芽を出す。栽培種の場合、G.horstiiが滑らかな光沢のある表面を持つものに対して、G.buenekeriiの場合は、粗い艶消しの表面を持つ。原産地では、このような表面の差は目立たないとしている。	ブラジル、Rio Grande do Sulでのカクタス採取家 Leopold Horst氏の義兄弟Rud W. Bueneker氏の父 Heinrich Bueneker氏に因む。
Gymnocalycium fleischerianum Backeberg Kaktus ABC: 288-289 (1935)	Cordillera, Paraguay Neembutu, Paraguay	Meregalli氏、Metzger氏、とR.Kiesling博士らにより、遺伝子解析を含む綿密な研究によりG.fleischerianumは、G.paraguayenseの品種として定められた。Vala Ladislav氏によれば、形態学的判断基準、分布地域、種子形状により、別の種として定めるのが妥当としている。花は大抵スリムな子房部を持ち、大抵巾の狭い先の尖った花弁を持つ。古い標本例の場合、横幅よりも背丈が高くなる。しばしば幅で殆ど隆起が目立たない稜を持ち、原産地では、力強い長さ0cmまでになる根を持つ。	チェコ人園芸家でカクタス愛好家のZdenk Fleischer氏に因む。
Gymnocalycium horstii Buining KuaS 21(9): 162-165 (1970)	Rio Grande do Sul, Brazil	白から薄いピンクの大輪の花を咲かす。体形は15cm以上にもなり、側芽を出す。A. Hofacker氏によれば、G.denudatumと同じ場所に一緒に生えている場所があり、このような接点が存在するが、雑種 (Hybrid) が存在するかどうかについては分らないとしている。	ブラジル、Rio Grande do Sulでカクタス採取と輸出を行ったドイツ系のLeopoldo Horst氏に因む。
Gymnocalycium megalothelos (Sencke ex K.Schumann) Britton & Rose Gesamtbeschreibung der Kakteen: 415 (1898)	Paraguay Rio Grande do Sul, Brazil	日本で天王丸とされる種は、この学名のものに相当するかも知れない、学名の通り、大きな隆起と大抵深く入り込んだ刺座の胴体を持ち、ばら色の先端を持つ白い花を咲かす。昔から知られていた赤い花を咲かすG.denudatumで園芸種では無い、ウルグアイ産の植物がG.megalothelon v. susannaeeとしてH.Till氏により、2005年に学術記載された。有名な、赤い花を咲かすG.denudatumとG.baldianumの交配種G.denudatum cv. "San Suba"とは、全く別種。	ギリシャ語 "megas, megale" "大きい"とギリシャ語 "thele" "疣" と合成語。
Gymnocalycium mesopotamicum R.Kiesling CSJ (GB) 42(2): 39-42 (1980)	Corrientes, Argentina Cordoba, Argentina	イギリスのキュー植物園とアルゼンチンのダーウイン研究所の共同により、発見された種。光沢ある緑の直径3~4cmの胴体を持つ小型種、良く側芽を出す。長く細い花首の白い花を咲かす。	Mesopotamiaの地域、つまり、Parana川とアルゼンチン・コリアンテ州、ウルグアイのEnter Risoの間に生息する事に因む。
Gymnocalycium ourselianum (Cels ex Salm-Dyck) Y.Ito (=Gymnocalycium multiflorum (Hooker) Britton & Rose Curtis Botanical Magazine 71: 4181 (1845) and Cacteeae in Horto Dyckensi Cultae Anno 1849: 34 (1850)	Paraguay	AGGのH.Till氏らは、Schumann氏が命名したEchinocactus multiflorus= Gymnocalycium multiflorumは、E. Ourselianum= Gymnocalycium ourselianumと異名同種で、パラグアイ産の植物であり、変種 白刺(albispina)K.Sch., 変種 parisiensis K.Sch., 変種 (ガンマー)hybopleura K.Sch.も、同様にパラグアイ産の植物と見ている。伊藤芳夫氏が、サボテン図説で、G.Ourselianum(和名 春裳玉、王春玉)パラグアイ産としている種に一致し、彼の挿絵も、それを表しているように見える。日本で春裳玉や王春玉として流通しているものと、似ている点はあるが一致しない。現在の春裳玉や王春玉は、G.ourselianum、G.monvillei、G.multiflorumなどの混乱により、派生した園芸種(交配種)と考えられる。	
Gymnocalycium paraguayense Schumann Bulletin de l'Herbier Boiss. 2, 3: 252 (1903)	Cordillera, Paraguay Paraguari, Paraguay	光沢ある表面を持つ胴体、比較的細い3~5本の刺が表面に沿う。花は、白から薄いピンク色で赤い色の花喉、力強い子房部と幅広い花弁を持ち、ずんぐりしている。短い花を持つタイプと長い花を持つタイプがある。Vala Ladislav氏によれば、G.paraguayenseの種子は、例外なくG.fleischerianumのそれよりも半分だけ大きいとされる。日本で和名 モンビー玉は、この種からの園芸種と思われる。	パラグアイで見つかることによる。
-B-B3 Pileisperma(H.Tillの分類による亜節、又は列)			

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium bodenbenderianum (Hosseus ex Berger) A.W. Hil Kakteen: 221-222 (1929)	La Rioja, Argentina	広い意味ではG.riojenseと同じだが、AGGはG.bodenbenderianum(和名 怪竜丸)を特別にsensu stricto(狭い意味)として区分している。その理由として、平坦な胴体、とりわけ低地で産出する個体、反対の色調(基部が暗くて、先端が明るい)、大抵より短くより柔軟な刺、及び、花弁が花筒よりも短い花をあげている。一方R.Kiesling博士やPilz氏はG.riojenseも含めて、G.bodenbenderianumとしている。	アルゼンチン在住、ドイツ人鉱物学者Bodenbender博士に因む。
Gymnocalycium ochoterenai Backeberg Kaktus ABC: 293, 417 (1935)	Cordoba, Argentina La Rioja, Argentina San Luis, Argentina	灰緑色でつや消しの表皮を持つ渋い品種で、幅広い地域に分布する。刺の出方や長さなどで、非常に変化に富む種である。生息地を調査したH.Till氏とG.Neuhuber氏は、Backeberg氏とKnutz両氏がKaktus-Lexikonで記載した3つの変種 (var. polygonum, var. tenuispinum, var. varispinum) は、群生地では、その“3つの型”のうち1つか2つ、あるいは3つ全てが見つかるとし、すべて、変異の範疇にあるとしている。唯一、両氏の著作の中で、変種cinereumは、非常に画一的で、意味ある相違により学名は保持されるとしている。	メキシコ人植物学者Issac Ochoterena氏に因む。
Gymnocalycium ragonesei Castellanos Lilloa 23: 5-13(225-227) (1950)	Cordoba, Argentina Catamarca, Argentina	G.ragoneseiもG.stellatumの類縁種である。Stellatum類縁種の小型に留まるタイプの中で最小の胴体サイズを示す。直径50mmを越えるのは珍しい。また、現地でも見つけるのが困難で、これを最初に発見した、H.Fechser氏は60年間それを再発見していないらしい。	アルゼンチン人植物学者Arturo E. Ragonese氏に因む。
Gymnocalycium rojense Fric ex H.Till & W.Till Kakteenjager: 8 (1929)	La Rioja, Argentina Catamarca, Argentina San Juan, Argentina	ヨーロッパでは、G.sp. L. Col.で入った本種を、間違つてG.asteriumやG.stellatumとして流通している場合がある。広い意味ではG.bodenbenderianumと同義語とされるが、AGGはG.bodenbenderianum(和名 怪竜丸)を特別にsensu stricto(狭い意味)として区分している。	ラリオハ州で見つかる事による、チェコ人カクタス愛好家Kozelsky氏に因む
Gymnocalycium stellatum Spegazzini (和名 竜頭) Anales de la Sociedad Científica de Argentina, 99: 62-64 (1925)	Cordoba, Argentina Catamarca, Argentina	和名 竜頭の学名は、G.quehlianumとされて来た。しかし、最近、H.Tillの主張が認められ、G.stellatumが正式の学名に相当する。一方、G.stellatumの和名は守殿玉とされて来たが、守殿玉として日本で流通しているのは、G.riojense系統のものである。G.stellatumには、多くの変種や亜種があるが、その中で、G.stellatum亜種 occultumは、Catamarca州に生息し、G.stellatum類縁種の最北の一族として、G.stellatum典型種とは、濃い茶色の肌色とより剛直な刺などで異なるとしている。G.asteriumとして日本に入ってきた和名 新鳳頭の学名は、G.stellatumが相当すると思われる。	ラテン語の“星型”の意味する、稜の並び方由来とする。
-B-B4 Insertae sedis(H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium acorrugatum J.Lambert Succulenta 67(1): 4-7 (1988)	San Juan, Argentina	R.Kiesling博士とD.Metzger氏が2003年にG.acorrugatumをG.castellanosiiの亜種に置いたが、AGGのG.Neuhuber氏らは形態、分布地域、種子の特徴により、種として維持すべきとしている。種子はG.castellanosiiに比べ、明確にSchutz氏のMicrosemineumの特徴があるとしている。産地もSan Juan州で、少し離れている。	ギリシャ語の無いとラテン語の溝の有るとの合成語、殆ど真っ直ぐな稜に因む。
Gymnocalycium bozsingianum B.Schutz Kaktusy 13(6): 124-126 (1977)	La Rioja, Argentina	H.Till氏とH.Amerhauser氏によれば、G.bozsingianumは、G.hossei類縁種に類似している。相違点は、刺の数が少なくより突き出し、刺座は円い(G.hosseiの場合楕円形)。G.hossei類縁種の花は本質的に濃い色をし、赤い花喉部を持たないが、本種は明るいバラ色の花で、赤い花喉部を持つ。種子も、また大きく異なり、G.hossei類縁種は真黒で、目の粗い、でこぼこの有る種子を持ち、その隆起は肉眼で認識できる。一方、G.bozsingianumは茶色で、滑らかで、光沢のある種子を持ち、強力なレーベでもって、始めて種子の細かく粒粒が見えるとしている。	オーストリア人のギムノ愛好家で、ギムノカリキウム専門家Franz Bozsing氏に因む。
Gymnocalycium castellanosii Backeberg (和名 刺魔玉) Kaktus ABC: 287, 416-417 (1935)	La Rioja, Argentina	H.Till氏によれば、種子グループMicrosemineumとも、種子グループTrichosemineum(今日、亜節Pileisperma)の様子とも、判別できない種子構造を持つ。Castellanosii類縁種は、比較的小さな生活圏を持ち、亜節Pileispermaの分布地域の中央部に在り、進化的な発達段階にあると考えられている。種子形態、色調、サイズの相違の他、殆ど滑らかから、強く粒粒のある種皮があり、統一性の無い種子タイプを持つ。	アルゼンチン、植物学者Carlos Spegazzini氏の助手Alberto Castellanos博士に因む。
-C-C1 Terminalia(H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium damsii (Schumann) Britton & Rose (和名 龍蛇丸) Gesamtbeschreibung der Kakteen, Nachtrage 119-120 (1903)	Santa Cruz, Bolivia Bahia Negra, Paraguay	H.Amerhauser氏は、取り間違われやすい、G.anisitsiiとG.damsiiの差を比較している。G.damsiiの場合、押しつぶされた球形で頭頂部は刺で武装、10稜で深い溝で分割され、明瞭な瘤状隆起が並ぶ。刺は、8本刺で、突き錐形状の丸刺、長さ1-2cmまで、白色、先端は茶色。花は長さ6-6.5cmのスリムな花、花弁は先の尖ったランセット型、全開時には花弁は強く後ろへ反り返る。果実は円柱形状、熟すると赤色になるといわれる。	ドイツ人カクタス愛好家、かつMonatsschrift fur Kakteenkundeの編集者でもあったErich Dms氏に因む。
Gymnocalycium friedrichii (Werdermann) Pazout (和名 牡丹玉) Bluhende Kakteen und andere sukkulente Pflanzen Mappe 29, pl.113 (1936)	Santa Cruz, Bolivia Cordillera, Bolivia Boqueron, Paraguay	Gymnocalycium friedrichiiは、当初はWerdermann氏により、G.mihanovichiiの変種として学術記載された。G.mihanovichiiは広く分布し、花が緑色から茶緑色で半分開し、果肉が赤いし、これに対しG.friedrichiiは、明るいバラ色から暗いバラ色の花で太陽光により完全に開く。果肉は白色(無色)、海岸から約700km内陸部に入った小さな地域のみで見つかる。このことから、技師Frantisek Pazout氏は、チェコ語のカクタス雑誌Fricianaで、1964年変種friedrichiiをG.mihanovichiiから切り離し、独立した種とした。また、Pileam氏やD.Hunt博士が、同名異種としているG.stenopleurum F.Ritterを、V.Schaedlich氏は、大型になり、花が白色からバラ色、頭頂部の刺座に密生した綿毛が生えていることなどにより、種として取り扱うべきとしている。	ドイツ人写真家、チャコ戦争の間、戦争報道写真家として仕事しながらカクタス採取を行ったAdolfo M. Friedrich氏に因む。
Gymnocalycium eurypleurum Plesnik ex Ritter (和名 勇将丸) Kaktusy 8(3): 70-72 (1972)	Nueva Asuncion, Paraguay	V.Schaedlich氏によると、いつも単幹で生え、稜数は、Ritter氏の学術記載どおり、個体の大きさごとに7から12の間を変動する。刺は突き錐形状、真っ直ぐあるいは、僅かに曲がる、明るい茶色、大きな個体は、しばしば短い円柱形状になり、直径で160mmに到達する。G.eurypleurumは乾燥した森に生えていて、変異が少なく画一性であるとしている。	ギリシャ語の“幅広い稜”を意味する。
Gymnocalycium mihanovichii (Fric & Gurke) Britton & Rose (和名 瑞雲丸) Monatsschrift fur Kakteenkunde 15(9): 142-143 (1905)	Alto Paraguay, Paraguay Boqueron, Paraguay Santa Cruz, Bolivia	G.mihanovichiiの表皮は、G.friedrichiiが、ざらざらした表皮なのに対し、滑らかである。また、G.friedrichiiが完全に開くバラ色から白色の花であるのに対し、緑色から茶緑色の決して完全に開かない花を持つ。変種senogonumはやや大型になり、古くなるほど短い円柱形状の姿になるとされる。H.Amerhauser氏は、変種filadelfenseと変種chlorostictumは、変種stenogonumの異名同種としている。	A.Fric氏のバラグアイ旅行を援助した、ユーゴスラビア人船主Nicolas Mihanovich氏に因む。
-C-C2-i Schikendantziana(H.Tillの分類による亜節、又は列)			

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium bergeri Neuhuber Gymnocalycium 14(4) 417-424 (2001)	Salta, Argentina	G.Neuhuber氏により、G.schickendantzii亜種bergeriとされる。氏の記述によると、このサルタ州産の亜種は、1本の中刺、強く匂いがし、殆ど曲がらず、短く頑丈な円錐形の子房と茶色の葯を持っている花により、基本種とは異なるとしている。また、生息場所は海面からおおよそ700mの高度、孤立した地域に単独で生え、G.schickendantziiに分類される別の物は出現しないとしている。同様にサルタ州南部に生えているG.marsoneriとはその球形の成長形態、その茶色の葯により異なり、また、サルタ州の南西部に広く生息するG.delaetiiとは短い円柱形の成長形態と周辺部ではなくて、頭頂部の縁の外に出現する花やバラ色にならない胚珠などにより異なるとしている。G.michogaと呼ばれる種の中の一部の種だと思われる。	オーストリアLenzing在住の、ギムノ愛好家であるFranz Berger氏に因む。
Gymnocalycium delaeti (Schumann) Hosseus (和名 天主丸) Monatsschrift fur Kakteenkunde 11(12): 186-187 (1901)	Salta, Argentina Tucuman, Argentina La Rioja, Argentina	G.delaetiiは、種子グループMuscosimineumの南部地帯の種と同様、ヘルメット形状の種子を持つが、灰色から黒茶色の葯、灰色から黒色の花粉により、それらとは逸脱している。H.Till氏は、種子の形態と葯の色において北部地帯と南部地帯の結びつきを意味し、一方で、短い子房を持つ原始的特徴が現れているので、古い種ではないかとしている。日本で流通している、和名 天主丸は、G.schickendantziiである場合が多く混同されている。この種は、花の鱗片がバラ色に対し、G.schickendantziiは、明るい緑から灰緑である。	ベルギー人多肉植物専門家で庭園主のFrans de Laet氏に因む
Gymnocalycium hamatum F.Ritter Kakteen in Sudamerika 2: 663-664, 823 (1980)	Chuquisaca, Bolivia Tarija, Bolivia	単幹で、扁球状に育つ、肌色は明るい緑色、学名の由来の黄色から灰白色のわずかに曲がる棘を持つ、刺の先が必ずしも曲がっていない個体もある。この種の場合、G.marsoneriの花粉が黄色に対し、ボリビア産の節Terminaliaの分類学種のように花粉が灰色から黒色。	ラテン語で"鉤状に曲がった"を意味する、刺の先端が後方に曲がるため。
Gymnocalycium marsoneri Fric ex Y.Ito (和名 綾鼓) Explanatory Diagram of Austrochinoacactinae: 175 + 293 (1957)	Salta, Argentina Chuquisaca, Bolivia Tucuman, Argentina Nueva Asuncion, Paraguay	扁球状に育つ種である。種子グループMuscosimineumの北部地域の種と同様な球形の種子を持つ。しかし、黄色の葯と花粉を持つ。H.Till氏によれば、この種もG.delaetiiと同様に、短い子房を持ち、原始的特徴が現れ、種子の形態と葯の色において種子グループMuscosimineumの北部地帯と南部地帯の結びつきを示す種であるとしている。	アルゼンチン人カクタス採取家Oreste Marsoneri氏に因む。
Gymnocalycium schickendantzii (F.A.C.Weber) Britton & Rose (和名 ; 波晃竜) Dictionnaire d' Horticulture: 470 (1896)	Catamarca, Argentina La Rioja, Argentina San Luis, Argentina San Juan, Argentina Santiago del Estero, Argentina	アルゼンチン北西部のサルタ州南部からサンルイス州の南半分まで、海拔で高度が150mから1500mを越えない高地の広範囲に分布する種で、変異が大きく、G.Neuhuber氏によれば、G.schickendantzii亜種bergeriが最も古い種で、それが南と東へ伝播したと考えている。胴体は単幹、古い株では短い円柱形状になる。花は大抵、甘ったるい芳香を放ち、ジャンベングラス形状、高さ50mmから563mm、直径は32mmから40mm、大抵はバラ色中筋を持つ、明るいバラ色で稀に白色、完全に開くには高温と大きな光度を必要とする。葯は明るい茶色あるいは黄色、花粉は黄色としている。	アルゼンチン、ツクマン在住のドイツ系教師でカクタス採取家Schickendantzii氏に因む。
-C-C2-k Periferalia(H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium anisitsii (Schumann) Britton & Rose (和名 翠晃冠) Bluhende Kakteen - Iconographia Cactacearum 1: pl.4 (1900)	Chuquisaca, Bolivia Tarija, Bolivia	H.Amerhauser氏は、取り間違われやすい、G.anisitsiiとG.damsiiの差を比較している。G.anisitsiiの場合、胴体は球形、殆ど剥き出しの頭頂部、稜は11枚で、アゴ状の隆起を持つ。刺は5本から7本、しばしば緑刺と中刺とが分類できない。花は釣鐘形状、長さ4cm、幅広で楕円形。果実は紡錘形状で、長さ2.5cmで直径は1cm、熟すると黄緑色になるとしている。葯は灰色。Volker Schaedlich氏がブラジルのRio Apa河の北岸で、後には河の両側でG.anisitsiiを見つけている。	薬剤師で、植物愛好家、パラグアイAsuncion在住Daniel J. Anisits教授に因む。数度にわたり、K.Schumann氏に植物資料を送る。
Gymnocalycium holdii Amerhauser Gymnocalycium 16(3): 523-532 (2003)	Santa Cruz, Bolivia	H.Amerhauser氏はanisitsiiの新しい亜種holdiiとして学術記載している。列 k Periferaliaの最も北西の群生、G.anisitsiiとの相違は、扁平球形状、扁平な根、直径70mmから100mmで高さ4cmから5cm幅広い隆起のある稜、5本から7本の刺、弾力性が有り、胴体の方へ曲がったり、胴体に沿ったりする、時々多数本が扱れる。下のほうに向かう刺が通常最も短い。釣鐘形状で(G.anisitsiiの場合漏斗形状)純白の花、葯の中の花粉は暗い黄色で、果実と種子は基礎種(G.anisitsii)と非常に似ているとしている。	Amerhauser氏のボリビア旅行の際の同行者であったオーストリアGraz在住のGerfried Hold氏に因む。
Gymnocalycium matoense Buining & Brederoo KuaS 26(12): 265-268 (1975)	Mato Grosso do Sul, Braz	ブラジル産の刺の黄色が美しい品種。H.Amerhauser氏によれば、花、果実、種子ではG.megataeとの相違は殆ど観察されないで、G.matoenseはG.megataeの亜種の間種であるとしている。	ブラジル、Gros du Sulの連邦首都Matoに生息することによる。
Gymnocalycium megatae Y.Ito (和名 翠盤玉) Explanatory diagram of Austrochinoacactinae: 292, 172 (1957)	Santa Cruz, Bolivia Cochabanba, Bolivia Boqueron, Paraguay	多くの分類学者は、伊藤氏が、種として分類したG.tudae(和名 碧盤玉)とG.onycacanthum(和名 鷲爪玉)は、G.megatae(和名 翠盤玉)の異名同種としている。H.Amerhauser氏によるとG.megataeはボリビアのEytiiから南東に向かって巨大な主要分布域を形成し、パラグアイの地域だけでなくブラジルの地域まで広がっているとしている。V.Schaedlich氏は、G. onycacanthumタイプは、ウルグアイで特に見られるが、G.megataeタイプは見られないとしている。また、ボリビアとパラグアイの国境のChacoで見られるG.megataeのタイプは、大きくなり、仔を吹かないとしている。一方、パラグアイのFiladelfia地域のG.megataeは、非常に肌が黒いとしている。G.eytianumは、非常に近い類縁種である。	日本人、カクタス愛好家、目賀田守種氏に因む。
-D Pirisemineum(H.Tillの分類による亜節、又は列)			
Gymnocalycium pflanzii (Vaupel) Werdermann (和名 天賜玉) Zeitschrift fur Sukkulentekunde 1(8): 83 (1923)	Santa Cruz, Bolivia Chuquisaca, Bolivia Tarija, Bolivia Cordilera, Bolivia Tucuman, Argentina	H.Till氏とW.Till博士によれば、G.pflanziiの果実は球形で、完熟するとカーミン系赤色になり、果実の上から1/3で横向きに開裂、種子は果肉(Pulpa)の中にまったままで、果実が縦に開裂し、果肉が白いG.zegarrae類縁種と区別している。また、G.pflanziiの生息地は全て海拔1200m以下に存在するとし、G.pflanzii subsp. dorisiaeは、唯一の例外であり、その産地は2300m以上にあり、G.pflanzii subsp. dorisiaeをG.pflanziiやG.zegarraeの原型と考えているとのことである。分布地域はアルゼンチンだけで無く、ボリビアやパラグアイでも見つかると大きな分布を持つ。変種paraguayense、変種lagunillasense、亜種argentinense、亜種 dorisiaeが分類されている。	ボリビア、ピラモンテのドイツ人領事Karl Pflanz博士に因む。

種名(和名)原記載誌等	自生地	種の特徴やコメント等	名前の由来
Gymnocalycium zegarrae Cardenas KuaS 9(2): 21-27 (1958)	Santa Cruz, Bolivia Chuquisaca, Bolivia	H.Till氏とW.Tii博士によれば、G.zegarraeは果実の白い果肉だけでなく、幼年期は灰緑色、青灰色の胴体色、より大きな刺座、大抵より短い子房部を伴う小さな漏斗形状の花、果実は垂直に開裂し、種子と一緒に果肉が押し出されるなど、G.pflanziiとは異なるとしている。また、分布地域はG.pflanziiの全分布地域の北にあり、G.zegarraeの産地はこれまで海拔1300m以下には見出されていないとしている。G.zegarraeの類縁関係種の最も高い場所にある生息地は亜種G.zegarrae ssp. millaresiiの産地で海拔2000mと2480mの間にある。変種riograndense、亜種millaresii、とG.pflanzii ssp. dorisiaeは、今まで海拔2000m以下では観察されないとしている。また、G.tominenseは、亜種millaresiiのタイプとしている。Backeberg氏によるG.comarapenseは、G.zegarraeの一つのタイプ、F.Ritter氏のG.pflanzii var. albipulpaの植物標本館の種子見本は、G.pflanziiとG.zegarraeが混ざっていたらしいが、日本に入って来た、Winter種子の肌色が紫色になるものは、G.zegarraeの一つのタイプと思われる。	ボリビアでのカクタス研究支援者German Zegarra Caero技師に因む。

品種の解説は主にオーストリアギム 研究グループ(AGG)の記載による。AGGの分類は、種を細かく分類するので、コレクター向きである。大きな分類をとる D.Hunt博士、中間的な分類をするR.Kiesling博士の分類とは、違ってくる。D.Hunt博士らの最近の著書 The New Cactus Lexicon 2006 Editorial Committee:David Hunt, Nigel Taylor ,Graham Charles, and their supported team は、種をかなり統一しようとしており、コレクターとしては受け入れがたい。